慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米価調節私見（上）
Sub Title	
Author	気賀, 勘重
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.1 (1916. 1) ,p.1- 26
JaLC DOI	10.14991/001.19160101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む

謹賀新年

傷害保險兼營

普通傷害保險
海陸旅行傷害保險
內地陸上旅行傷害保險

料率低廉　契約簡便　切符販賣

東京市日本橋區本革屋町五番地(三井銀行横)

共同火災保險株式會社

營業種類　火災保險、海上保險、運輸保險、傷害保險
營業部支店所在　東京、大阪、京都横濱名古屋神戸、仙臺福岡

三田學會雜誌第十卷第一號

論說

氣賀勘重

米價調節私見(上)

一

我國の米價は最近數年間に著しき激變を見たり。明治四十五年七月二十三圓を超え爾來常に二十一二圓の間に在りたる東京正米市場の中米相場は大正二年十月以來急轉直下して翌三年五月には十六圓前後に落ち同年十二月には遂に十一圓臺に下るに至れり、僅々一年有餘の間に十有餘圓の變動は實に米界稀有の事實にして、米價激變調節の必要の云爲せらるゝ一見宜ならずとせずと雖も、併し價格

の激變といふ點より觀れば此種の事實は米價史上決して珍らしき現象に非ず。一個年内に十二圓餘の變動といへばこそ稀有視せらるれども、其變動の割合よりいへば、一年有餘の間に半價に下落せりといふに過ぎず。而して價格が一年乃至二年の間に或は半價以下に減じ或は倍額以上に騰貴したるの實例は我が明治の米價史上決して少なしとせず。明治元年度に於て米價が三圓臺より一躍七圓九十錢に暴騰せる、明治六年四圓臺に在りし米價が翌年九月には八圓餘に奔騰し其翌年には三圓六十錢に下り更に其翌九年には二圓臺に達するに至れる、明治二十一年四圓臺に在りし米價が其翌年六月に十圓八十錢に昇り更に其翌年には六圓臺に下れる、明治三十一年度中に於て一度十七圓六十錢に達せる相場が數月中に九圓内外に下落せる、近くは明治四十年より同四十二年に亘りて大に暴落せる何れも皆是なり。

要するに米價の激變は決して珍らしき現象に非ずと雖も、我國民經濟の上より觀れば、是れ決して好ましき事實に非ず。蓋し、米價の高低は一方に於て各種商工業の生産費の高低の一原因と爲り其經營を不安ならしむると共に、一般の消費者殊に定額の所得に衣食する者の生活を不安定ならしむるものあり、又他の一方に於ては米穀の生産者たる多數農民の所得の高低と爲り其消費能力を變動せしむるものあり、其影響の及ぶ所決して一階級一産業に止まらずして廣く社會各方面の産業の經營及び生活を不安定不確實ならしむるの實あるなり。唯、社會多數の人民が自給自足の所謂る自然經濟に衣食すると愈々多く、交易に依賴すること愈々少なきに從ひ、米價變動の此影響を感ずる者は益々少なかる可しと雖も、自足自給の經濟の益々凋衰するは經濟社會進歩の大勢にして、商工業者は勿論、農村の人民も日に益々貨幣經濟的と爲り、其生産亦益々營利的に赴きつゝあるは我邦現下の趨勢なり。從つて米價變動の爲に其産業並に生活の不安全を感ずること益々著しきに至れるも亦必然の勢といはざる可らず。米價の激變が古來常に其實を存せしに拘らず、最近に至りて其弊害の特に喧しく云爲せられ、其調節の必要の殊に著しく力説せらるゝに至れる所以實に此に存せり。

然れど米穀も亦一種の商品なり。其價格は市場を支配する一定の法則に支配せられ、其變動は價格を支配する一定の原因よりして生じ來るものなり。故に其原因にして一定不變又は人力の左右し得可らざる自然的事實に在るものならしめば、

價格の變動如何に激しく其調節如何に望ましとするも吾人は復た之を如何とも
する能はざる可し。敢て問ふ米價を支配する原因的事實は果して人爲的の制馭干
渉を許すものなるや否や。

二

物價は一般に需要と供給の關係に依りて決定せらる。換言すれば需要と供給の
平均する點に於て定まるものなり。由來市場には購買を希望する幾多の人士ある
と共に、其一方には又販賣を希望する多數の人士ありて、賣買は其間に行はるゝも
のなれども、購買希望者は何れも如何なる代價にても購入せんと欲するものに非
ず、販賣希望者亦何れも代價の如何を問はず之を賣放たんとするものに非ず。販賣
希望者は生產費、仕入直段、手許資金必要の程度、將來の希望其他種々の事情に鑑み
て各自一定の供給代價を想定し、該想定代價以上ならば之を賣らんとすると共に
其以下の代價にては賣却を肯んぜざるを常とし、購買希望者亦之と等しく各自現
下の欲望、資力、將來の希望等種々の事情に照してそれ〴〵一定の需要價格を想定
し、該價格以下なれば之を購入するに躊躇せざると共に代價若し其以上に出づれ
ば其購入を差控ふるの常なり。此想定の需要代價と供給代價は各人それ〴〵の事
情境遇に依りて各自それ〴〵に決定する所にして何人も市場に於て明に之を公
言することなければ之を詳にするに由なしと雖も、各人がそれ〴〵に一定の代價
を想定し、其想定代價に依つて進退する次第は代價の高低に從ひ市場に於ける各
人の態度の區々なるに依りて之を窺ふを得可し。即ち需要者側及び供給者側共に
各人の想定代價は區々たるものにして、需要者が該價格以下ならば購入せんとす
る其價格にも人に依りて高低種々の階段あれば、供給者が該價格以上ならば賣ら
んと欲する其價格にも等しく人に依りて高低種々の階段あり。故に市場に於て需
要者の申出づる購買價格の高きに從ひ之に應じて供給せんとする者の數は益々
增加す可く、之に反して其購買申出價格愈々低くければ之に應ぜんとする供給者
は益々減少す可し。之と同一の理由よりして販賣希望者が申出づる賣價愈々高け
れば之を購入せんとする實際の需要者は益々少なかる可く、之に反して賣價愈々
低ければ購買を希望する者は益々增加す可し。通例價格は需要と供給の關係に支
配せらると云ふと雖も、併し他の一面より觀れば需要と供給は斯の如く價格に依

りて支配せらるゝものにして、即ち價格の高騰は需要を抑へ供給の增加を促すの實あると共に、其低落は需要を增進し供給を抑制するの作用あるなり。

市場の競爭は斯る關係の下に於て價格の高下に依り需要と供給を平均せしめ、此兩者の平均せる價格を其市場に於ける賣買の實際價格即ち所謂る市價として賣買取引を行はしむるの常なり。即ち購買者又は販賣者側よりして市場に申出でらるゝ一定の價格に於て、需要若し供給に超過することあらんか、其需要者中一層高き價にても購はんとする者は往苒躊躇せば遂に購入するを得ざるに至らんことを惧れ先づ購入せんとして一段の高價を申出づ可く、而して販賣者は先づ可及的高價に賣却せんことを欲す可きが故に勢ひ此種の高價購買者に賣向ふことゝなりて比較的低き需要代價を想定せる者は遂に購入する能はざることゝなる可し。供給の需要に超過せる場合亦之と等しく供給者相互の競爭は賣價を引下げて賣競ふことゝなり比較的高價に賣るに非れば賣らざる可しと決心せる賣方即ち供給代價の比較的高き販賣希望者は遂に賣ることを得ずして市場を退くことゝなる可し。市價は即ち此の如くして一方には該價格乃至以上にて購買し得ざる微力なる需要を市場より驅逐し又一方には該價格乃至以下に販賣し得ざる微力なる供給を市場外に驅逐し、依て以て需要と供給を適合せしむるの作用を爲すものにて、市價の高低は畢竟此驅逐作用に依り需要供給の何れか一方の其市場に超過せる部分を場外に驅出し、以て兩者の適合を得せしめんとする其手段に外ならざるなり。

今、我が米穀に就て之を言へば其價格の騰貴は我國民中の一部薄資者又は米食に熱心ならざる一部人士をして米穀の購入を廢して他の代用物に依るに至らしめ、若しくは農民其他の貯藏米を賣出さしめ依て以て市場に於ける其需要をば當時に於ける其供給に適合せしめんとする手段、而して又其下落は之と等しく依て以て米の消費者を增加せしめ若しくは米の賣控を爲す農民を增加せしめ當時に於ける其需要と供給とを平均するに至らしめんとする手段に外ならず。故に市場に於ける其需要にして供給に超過することあらんか、米價の騰貴は其騰貴に依りて一定數の人士をして米の購買を見合さすに至らしむるか又は從來賣惜める貯米者をして進んで之を賣出すに至らしめ、依て以て需要と供給の平均を見るに至

るまでは止まざる可く、供給の需要に超過せる場合に於ける其下落の趨勢亦之に異なることなし。而して此點より觀れば我國の米價は爾餘の物價に比し著しく變動す可き特種の原因を有せり。他なし需要供給共に甚だしく增減の自由を缺けると換言すれば彈力性の缺乏せると即ち是なり。

三

即ち需要に就て之を觀れば其用途は主要食料を主として酒造原料之に次ぎ、爾餘の工業原料用途亦多く日用必須品の製造に在り。何れも容易に削減を許すものに非ず。從つて僅少の代價の騰貴又は下落に依つて其節省を促すこと頗る困難なり。勿論如何なる必要品と雖も他に相當の代用品だに充分ならば多少の代價騰貴は相當に多數の消費者を驅りて其代用品の消費に移らしむることなきに非ず。必須の日用品に非ざる場合には殊に然るを見ると、例令ば種々なる粧飾品家具等の場合に其例少なからざるが如き次第なれども、多年慣用の主要食品たる我米穀の如きに在りては決して然るを得ず。試に思へ一石十五圓の米價が二十圓に暴騰せる爲に米飯に代ふるに麥飯、粟飯其他の食物を以てせんとする者幾何かある。日本酒の暴騰の爲に之に代ふるに麥酒（ブランデー）を以てせんとするの人士幾何かある。多少米食を節し多少洋酒を代用する者は或は之を見る可きも二三百萬石の米の需要を減せしめんが爲には一割乃至三割の騰貴にては不可能なること少しく考慮を回らす者の容易に推知し得る所なる可し。要するに我國民の米穀及び其精製物に對する欲望は深甚にして其需要は殆ど常に一定せるものといふ可く、少しく其需要を減少せしめんが爲には甚大の代價騰貴を必要とす可し。換言すれば多大の市價騰貴あるにあらざる限り需要は容易に減少せず。是れ凶歲に際し、其供給額の不足僅々平年作の四五分に過ぎざるに拘らず、市價の著しく暴騰する所以なり。

斯く需要を減せしむるの困難なると共に、之を增加せしむるも亦殆ど不可能なり。蓋し主要食料品の常として縱令ひ其價廉なりとするも世人は多く之を消費するものに非ず。清酒其他米を原料とせる製品亦概ね此類にて其原料の價格の少しく下落せるが爲に著しく多く需要を加ふるものに非ざるなり。即ち米穀に對する我國民の需要は通例殆ど常に均一にして增減なく、少しく之を增加し又は減少せ

しめんが爲には著しき代價の引下又は引上を必要とするなり。換言すれば我米穀の需要は經濟學者の所謂る彈力性を缺けり。而して此需要の彈性の缺乏は我國民現下の嗜好の繼續せん限り、國民多數の飲食品に對する嗜好一變して米飯と共に麵麭其他種々の穀食を常食とするに至り、米の騰貴は直に麵麭其他の代用品の需要を增すに至ると云ふが如き風を生せざる限り、容易に補はるゝことなかる可し。然かも一方より觀れば國民多數の嗜好常食の變化と云ふが如きは數年十數年の短期日間に實現し得可き事實に非ず。從つて米穀に對する需要の彈性の增加は近き將來に於ては全然不可能事といはざる可らず。此方面より生ずる其價格の變動は容易に調節し得可らざるなり。

四

さはれ縱令ひ需要に伸縮自在なる所謂る彈性なしとするも供給にして能く需要に適應し得るの彈性だにあらば價格の調節は敢て難事に非ず。生產の伸縮自在なる普通の工業生產物に在りては供給は通例需要に應じて伸縮し、依つて以て兩者相適合するの常にして、即ち需要新に增加すれば其價格一時騰貴するも、其騰貴は甚だしきに到らざる間に生產の擴張起り需要と供給此に再び適合するを例とし、需要の減退する場合亦之と等しく生產の縮少之に續きて市價の低落甚だしきに至らざるに需要と供給先づ適合するの風なり。唯突發的の原因に依り急激なる需要の減退又は增進を來せる場合には固定設備の轉用又は新設の急に行はれざる爲め一時市價に大變動を見ることありと雖も、斯る場合は寧ろ例外に屬し、需要增減の狀勢は大略之を觀取し得可く生產の伸縮亦概ね之に順應するの常なり。然るに米穀の場合に在りては事情稍々之と異なり、供給の伸縮頗る困難なるものあるのみならず、其供給は特種の原因に依りて年々歲々激變するの實あるなり。

勿論米穀の生產も永年月の間を通覽すれば需要の增減に適應せんとするの形勢なきに非ず。人口增加し米穀の消費量增加するに從ひ、米作技術の改良、施肥其他米作資本の增加、作付反別の增加等に依り生產の增加を見るに至れるは米作統計の明に示す所にして、此點に於ては米穀の供給も亦爾餘の貨物の供給と大體同樣の趨勢を示せりと雖も、年々歲々の供給に就て之を觀れば、爾餘の貨物の生產が概ね豫定の結果を生じ、從つて其供給亦豫定額と大差なきを得るの實あるに反し、獨

り米穀の生産は年の豐凶に支配せられて變動常なく其供給從つて豫定の如くなるを得ずして頗る變化多きの實あり。即ち年々歲々其價格の激變するを免れざる所以なり。

縱令ひ生産額に激變ありとするも我米穀にして例令ば米國又は「アルゼンチン」等の小麥の如く常に其産額國内の需要以上に出で、其一部分は常に外國に輸出せらるゝものなるか、若しくは英國又は獨逸の小麥の如く國内の産額常に其需要を充たすに足らず供給の一部分は常に之を外國に仰ぐを例とするの狀態に在るものなりせば、國内の豐凶は市價其物の上に甚だしき變化を起すことなる可し。蓋し斯る場合に於ては需要は供給と共に所謂る世界共通にして一國の豐作は他の凶作と相殺せられ、國内の供給の過不足は他邦の過不足に依りて補はる可ければなり。然るに我國の米穀は事情全く之に異なり、其供給は殆ど全く國内の生産のみにして他國の産米は大なる價格の相違を生ずるまでは之に代用せらるゝことなく、其需要も亦全く内國民に限られて海外に對する販路は我移住民の食料品としての外殆ど之を見ることなく、强ひて蘭貢其他の外米と競走せんとするも著しく代價を引下ぐるに非ざるよりは海外に於ける其競爭困難なるの事情に在り。略言すれば我米穀の需要は供給と共に殆ど全く内地に限られたるの狀あり。蓋し我産米に對する我國民の特殊の嗜好に基づくことにして、即ち我産米は外に出でゝは蘭貢其他の外米と對等若しくは以下に非れば需要を見ざるも、内地に在りては其需要價格遙に外米の上に出づるの實あり。而して其供給量は過去二十餘年以來常に平年に在りては少しく不足し、凶年に在りては數百萬石の不足を見ると共に豐年に在りては百萬乃至四五百萬石の過剩を見るの狀態に在り。概言すれば前後數年間の平均は需要と生産額殆ど相平均し、唯、年々僅少の不足を外米の輸入に依りて補ふの狀態に在り。故に凶年に在りては僅々年産額の一割にも滿たざる生産不足の爲にも米價は稀少貨物の性質を現はし、少數の購買希望者を市場の競爭場裡より驅逐せんが爲に市價は五割十割の昂騰を致すことあり、又其一方豐年に際しては之と反對に非常の價格暴落を生ずるに至るあるを見るなり。

要するに我産米にして年の豐凶如何に論なく常に全國の需要を充たすに足らざるの狀態に在らば其價格は常に所謂る稀少價格を示して全般の米價は我産米

の不足を補ふ外米の市價と大體上一定の直巾を維持しつゝ其外米の市況に支配さる可く、又常に産米過剰輸出持續の狀態に在らば決して稀少價格を生ずること なく、一に海外販路の市況に支配さる可し。即ち何れにしても廣く世界全般の需要供給に支配さるゝが故に甚だしき激變を見ることなかる可しと雖も現今の我米穀は凶年に不足し豐年に過剰となるの實あるが故に稀少價格と過剰捨賣の價格と相更代して現はるゝを免れざるなり。

五

さはれ我産米は常に過剰なるに非ず。前後數年を平均すれば多少供給不足の實ある次第は農商務統計の明に示せる所にして米穀の輸出入統計も亦明に此事實を示せり。故に此等の統計にして誤なしとせば我産米の價格は大體上稀少價格を現出す可き形勢に在りといふ可く、農家其他の一般民衆亦此理を知らざることなし。縱令ひ豐年に際し市場の供給米多く市價爲に下落することありとするも、豐年が三年五年繼續するものに非ざることは過去の經驗明に之を示せり。敢て統計數字の敎を待つまでもなく一般農民又之を熟知せり。當年の豐作に米價下落し殆ど生産費を償ふに足らざることあるも然かも一般の農民が敢て米作を廢止又は制限するものなく依然米作を繼續するは翌年の米價必ずしも其年の如くならざる可しと信ずればなり。農民が一時の米價下落の爲に米作を廢止せざるは決して單に作物變換の困難なるが爲のみに非ず、又一には米價の遠からず復舊否な騰貴するの日あるを確信すればなり。而して其確信は決して空想に非ず。一朝下落せる米價の二三年ならずして騰貴するは確乎たる根據あるの豫測決して當らざることなし。故に一朝豐年に下落せる米穀も之を貯蓄保存せば一年乃至二年にして必ず相當の高價に之を賣却し得るの日ある可きなり。然るに實際上豐年に當りて一般の農民が斯る將來を豫知しつゝ然かも貯米することなく相競ふて急速に賣却するに苦心し、其結果所謂る供給過剰を惹起して米價を下落せしめ、相率ひて自ら苦むの愚を爲す所以のものは何ぞや。

吾人を以て之を觀るに、農民及び地主が斯の如く異日米價の騰貴す可きを信じつゝ、然かも豐年に際し其所有米を賣急ぎて市價の暴落をも顧みざるに至る所以のものは畢竟其保有貯藏に伴へる幾多の失費と困難との之が賣却を餘儀なくせ

しむるものあればなり。

由來米穀の保存貯蓄には幾多の失費を伴ふものにて、其第一は倉庫の失費なり。農家自ら自家の倉庫に貯藏する場合には何等の經費を要せざるが如しと雖も、豐年の一二年繼續し米價爲に下落せる如き場合に殘存古米を保存貯藏せんと欲せば平素に於て必要以上の倉庫を準備せざる可らず。若し斯る準備なく不完全なる建物内に之を貯藏せば變質の爲に多大の損失を免れざる可し。何れにしても多少の損失を免れざると共に、之を他の倉庫に托する場合に於ては相當の倉敷料を支拂はざる可らざるなり。此倉庫費用と共に尚ほ一種の必然免る可らざる損失は貯藏に伴ふ數量の減損即ち所謂る升減是なり。此數量減損は米質に依り將た其貯藏の場所に依り或は百分の三といひ或は百分の七乃至十といふが如く必ずしも一樣ならずと雖も、兎に角一年間の貯藏に依り多少の升減を見るは何れの米にも通有なる事實なり。要するに倉庫の失費と升減の損失とは斯の如く地方に依り又米質に依り異なるが故に之を算定すること困難なりと雖も、其失費は何人も認むる所にして、他に一層大なる利益豫想の之を相殺するものなき限り米穀所有者をして其賣却を急ぐに至らしむる有力の一原因たるなり。

然れど米穀の所有者殊に農民をして此失費よりも遙に大なる苦痛を感ぜしむるものは米穀の變質なり。此變質の程度は勿論米質の善惡に依りて種々の相違あり、所謂る軟質米に在りては翌年度の夏期を持越すことすら頗る困難なるもの少なからざる其一方に於て、硬質米の良好なるものは一年有餘の貯藏も甚だしき變質を伴はざるが如き次第なれども、或る年度の產米が次年度米の收穫期を經過する頃に及んで多少の變質を見るは如何なる硬質米にも免る可らず。如何に良好なる古米も新米期に入りて其味大に劣るに至る事は吾人の日常實視する所なり。加ふるに更に此古米が尙ほ一年間貯藏せらるゝに至らんか、其變質は第一年度よりも更に甚だしく、多くは食料米として其用に堪えざるの程度に至るの常なり。然りて此變質と共に其價格の下落するに至るは自然の數なるが故に、甚だしき變質の虞あるが如き場合に於ては農家其他の米穀所有者は如何なる低價を以てするも兎に角其變質の生ぜざる以前に先づ之を賣却し了らんと勉めざるを得ず。所謂る軟質米及び前年度以來の古米は通例其年度の五六月以前に賣放たざるを得

ざるものにして、豐年の際古米の持越多き場合には此原因より著しく米價の暴落を來たすことなきに非ざるなり。

農家及び米商人は此變質の虞よりして時に米穀の賣急を爲すと共に、又資金の必要よりして賣急を爲すこと少なからず。米穀の賣却を一年間延期すれば其貯藏者は一方に於て前記の諸失費を損失すると共に、又一方には其代金額に對する一年間の利子を損失せざるを得ず。此利子は常に銀行に預金を爲すが如き裕福なる農民に取りては左程の巨額に非ざる可しと雖も、其賣却代金を以て種子肥料等の流動資本又は必須なる日用品の購入費に充つるを常とし、此代金を得ざれば之に相當する資金を借入れざるを得ざるが如き人々に取りては餘程の高率ならざるを得ず。蓋し農村に於ける利子は一般に商工業地に於けるよりも高率にして、對人信用の場合は殊に然るの常なればなり。故に農家初め米穀の所有者は縱令ひ將來の米價騰貴を豫想するも其騰貴が如上の失費と此利子損失とを償ふて餘あるの望あるに非ざれば、貯藏の決心を爲さずして先づ之を賣却せんとするなり。然るに大豐年の際又は相當の豐年の二三年繼續せる際には斯る騰貴は遠き將來に望むの外なき感を生ぜしめ、貯藏の大損失を懸念せしむるものなるが故に、米穀供給者は滔々率ひて賣却に苦心し、此に供給過剩を惹起すに至るなり。

或は此等一切の損失を顧慮するも然かも尙ほ貯藏を利とする程の低位に米價の下落することあり、而して米穀所有者亦此事實を確認して賣控を爲さんとするも、他に資金融通の途なく、資金の必要に迫られて止むを得ず所有米の賣却を爲すに至ることあり。米作を所得の主要源泉とする多數の農民、地代米を主要所得とせる多數の地主は多くは斯る境遇に在る者にして、豐年米價の下落時期に際し殊に多量の米穀の市場に提供せられ、下落の上に更に下落を生ぜしむるは多くは此原因に基づく。惟ふに地主及び農民に充分なる資金融通の途存するに於ては米穀の賣控を爲す者少なからざる可く、從つて豐年期に於ける其暴落亦大に緩和せらるゝ所ある可きなり。然るに我農村現下の金融狀態は恰も此必要に反せり。即ち米價高直なる場合には少量の米穀賣却以て必要の資金を地主及び農民に供す可く、米穀擔保の借入亦充分の資金を得せしむ可きが故に地主及び農民は更に一層の高直を豫想して賣惜を爲し過度に供給を減じて米價の暴騰を促進するの風あると共

に、米價の下落に際しては之と反對に、米穀の擔保借入以て充分の資金を得難く必要の資金收得の爲には益々多量の販賣を爲すの外なくして結局益々米價を暴落せしむるに至るの風あるなり。

六

以上の所說よりして之を觀れば米穀の需要は非常なる價格の引上又は引下に依るの外、之を調節するの途なく、其供給の根元たる年々の生產額亦人爲的に之を平均せしむるの途なしと雖も、供給其物即ち日々市場に提供せらるゝ賣却希望額は全然人爲的制馭を許さゞるものに非ず。豐年に於て過剩せる供給米を引受け之を貯藏して供給不足の凶歲期に之を市場に供給するの局に當る當局者だにあらば、平素齊一的なる需要に對して供給亦齊一なるを得可く、米價の激變亦依て以て之を避くるを得可きなり。元來我國の米產額は前述の如く消費量に比し平均年々多少の不足を示すが故に、巧に其供給を調節するに於ては其價格は常に稀少價格を維持し、年々歲々常に普通の生產費以上相當の高位を保ち得可きの狀態に在り。然るに、現下の實際に在りては豐年の過剩米貯藏の局に當る者は地主、農民及び米穀商人の思惑者にして何れも充分の資力なく又協同一致して供給を調節するの力なきが故に、米價の暴騰暴落を喚起する次第なり。然れば米價調節の能否如何の問題は畢竟此供給調節の局に當る可き充分有力なる當局者ありや否やの問題にして、米價調節の方法如何は如何にして其當局者をして此供給調節の局に當らしむ可きかの問題に外ならざるなり。

此見地より適當なる有力の調節當局者として先づ第一に着目せらるゝは言ふ迄もなく最大の資力と權力とを有する國家其自身ならざるを得ず。米價の暴騰又は暴落に際して世人の先づ政府に向つて其調節を要求する所以正に此に存せり。蓋し、政府は一方に多大の資本を左右し得るの實力を有すると共に又場合に依りては一般人民を强制し得可き絕大の權力を有すればなり。

然り而して政府をして此調節當局者たらしめ、爾餘一切の利害を顧慮することなく、單に米價の調節其物のみを主眼として國家の權力を充分に行使せしむることゝせば米價調節の方法は米穀專賣の制度に若くものなかる可し。政府をして年々歲々國內の產米全部を買收せしめ、日々月々平均的に之を賣出さしむることゝ

せば其賣價は彼の煙草又は食鹽等の如く政府の任意に之を一定し得可く、其騰落は一切之を避くること又難きに非ざるなり。唯國民必須の主要食料品に對して斯る制度を實施せんとするは消費の自由を制限し國民全般の幸福を殺ぐの大害あるは勿論、更に之に伴へる經費の絶大にして其實行手續の煩雜なること言語に絶するを思ひ、從來の經濟組織に大變革を加へて經濟界を攪亂すること甚だしきものなるに想到せば畢竟言ふ可くして行ふ可らざるの空想たるを免れざる可し。惟ふに其實施の結果を推想せば政府當局者をして結局全國民の共同生産、均等分配を主眼とせる社會主義に近き制度を實施せしめんとする極端なる空想家の外、眞面目に斯る說を唱ふるを得ざる可し。蓋し斯る制度は彼の煙草專賣又は食鹽專賣の實例にも既に明なるが如く、生産及び消費を自由にして之を實施し得るものに非ず、社會全般に對して其生産を監督制馭すると共に其消費をも隨意制限するに至らざるを得ざればなり。

七

政府の米穀專賣既に不可實行的なりとせば、政府をして直接に供給調節の局に當らしむるの途は豐年に於て全國の過剩米を買收貯藏せしめ、凶歲に臨んで之を賣却せしむると共に、其一方に於て外國米專賣を行ひ、以て年々の平均不足額を適宜補足せしむるの外ある可らず。換言すれば全國年々の米穀消費額及び生産額に對して精確なる調査を行ひ、其調査統計に基づきて平年消費額を算定すると共に年々の生産額を精査して平年消費額以上に相當する分量を買收することゝするか、若しくは一定の價格を想定して市價の其以下に下落するに及び米價の其一定價格に復歸するまで買收を繼續することゝし依つて以て其暴落を抑制すると同時に、生産不足の場合には等しく一定直段にて貯藏米の賣出又は外米の輸入に依りて其不足額を補ひ以て其暴騰を抑制するの方法を取る可きなり。最近の暴落に際して政府の實施せる買收策又は米價調節調査會に參考案として政府の提出せる常平倉案の如き何れも此趣旨に出でゝ唯其政府買收額の不充分なるものなるのみ。

何れにもせよ、此種の調節方法に據る時は米價の一定は復た之を望む可らず。平年普通に現はるゝ程度の市價の變動は交易界當然の現象として之を認容せざる

可らず。蓋し供給又は需要の全部を一手に收めざる限り代價の一定を望む可らざるは經濟學の敎ふる所の如くなればなり。然れば此種の方策の實施に當つて第一に際會する難關は政府は如何なる價格にて買收し如何なる價格にて賣却す可きやを決定するに在り。蓋し其買收價格高きに失せんか豐年期供給の潤澤なるに際しては政府に提供する米穀の量は非常の巨額に上る可く、又縱令ひ左程の豐年に非ずとするも金融の逼迫甚だしき際には、米穀所有者中一時之を賣却して金融の手段とする者も現はるゝに至る可く、從つて政府の買上米は非常の巨額に達して遙に實際の過剩米以上に上ることなきに非ざる可し。然りとて之が買收を一定額に限り其以上の買上を拒絕せんか、最近の政府買上にも其實を見たるか如く、政府の買上繼續期中一定の高價を維持するも其買上停止と共に忽ち暴落することゝなりて却つて調節の本旨に戻ることなきに非ず。之に反して買收價格餘りに低きに失せんか政府買收額は或は之を少からしむるを得可けんも、低價それ自身既に調節の本旨に反するを如何せん。

更に政府の貯米賣却の場合に就て之を觀れば其賣却代價は政府の認めて以て最高限度となせる價格なる可きも、實際內國米の供給不足して此價格にての需要起り來る如き場合には米價の必ずしも此に止まるを期待す可らず。勿論外國米の輸入は其騰貴の勢を抑制す可しと雖も、そは畢竟間接の抑制に過ぎず。日本人の日本米に對する嗜好今日の如くなる以上內國米と外國米とに附する價格の相違は國民富力の增進と共に益々大ならんとする傾あるが故に內國米價の上騰に對する直接の制限は此方法に依つて又充分の效果を見る能はざる可し。

然れど騰貴の抑制に對しては縱令ひ間接ながらも吾人は此種方法の效用を認めざるに非ず、唯下落の抑制に對しては其效果の頗る不充分なるを覺えざるを得ず。蓋し政府にして充分の買收を爲せば調節の效果は勿論前述の如く顯著なる可しと雖も、此顯著なる直接の效果を收めんが爲には國民經濟上多大の犧牲を覺悟せざる可らざればなり。即ち豐年に於て米價を一定の程度に維持する程の巨額の買收を爲さんが爲には、頗る巨額の資金を要するものあり。現に大正三年度の如き豐年に在りては其過剩米は少なくとも五六百萬石の多きに達す可く、之を一石十五圓にて買上るとせば政府は其年度に於て八九千萬圓の資金を用意せざる可ら

ず。豐年更に一年繼續することありとせば其資金は一億七八千萬に達す可く、加ふるに資金融通の爲に一時的賣却を試るものありとせば其金額は更に多きに上らざるを得ず。單に米價調節の爲に斯る巨額の國資を投じ一國財政の基礎を攪亂するの果して有利なるや否や既に頗る疑問なるが上に此財政攪亂に伴へる經濟上の變動は更に其弊害を大ならしむるものある可し。少なくとも我國現今の如き財政經濟の事情の下に於ては實行し得可き所に非ざるなり　（未完）

戰後の經濟的革新（一）

阿部秀助

一

戰雲茫漠、今日を以て翌日を知ること難し、況んや遠き將來をや、只だ一事の茲に明言し得可きものあり、曰く、戰後に於ける獨逸の經濟生活が遂に戰役前の狀態を繰り返すこと能はざることなりとす、何故に舊時の狀態を復活すること能はざるか、若、復活すること能はずとせば、何れの方面に其活路を求む可きか、論者は是等の問題を以下の兩方面即ち對內的原因殊に非經濟的動機より促さるゝ經濟政策の變更と對外的原因殊に販路の變遷に伴ふ經濟政策の變更とに就きて、聊か解決を試みんと欲す。

二